グリーン交悠録

失敗談から多くを学ぶ 19番ホールの楽しみ方

スコアを付けるより いい球を何回打てたかが大切

財界通信社（本誌）社長 **大中 吉一**

聞き手 ㈱ティアンドケイインターナショナル代表取締役／ゴルフ場設計者 **川田太三**氏

大中 冬のゴルフは厄介ですね。

川田 どうされましたか？

大中 先日、滋賀のジャパンエースゴルフ倶楽部で今年初のプレイでしたが、コースがカチンコチンで、ゴルフになりません。川田さんは今年になって何回周られましたか。

川田 4回です。今年は寒いですから厳しいですね。大中さんはいかがです。

大中 私は滋賀の1回きりです。カチンコチンはこりごりです。ところでこのコースは元・伊藤忠商事の社長だった越後正一さんが西日本一のゴルフ場を目指して造ったコースなのです。かの田中角栄さんが総理になる直前にメンバーになられたのですがのちに逮捕されましてね。メンバーの方が「どうしたらいいでしょう」と困り果てていましたが「自分達が頼んでメンバーになっていただいたのに、運悪くロッキード事件で捕まったからといっていきなり除名というのはおかしい」と言いました。ゴルフとは無関係ですからね。ご本人から辞退の申し出があったのなら別ですが、自分たちでロッカーナンバー1番を贈呈したにもかかわらずその仕打ちはないと思います。

川田 そのとおりですね。

大中 例えば『霞ヶ関カンツリー倶楽部』のメンバーに相応しいから会員にするというようなものです。

川田 あのコースは本当にインビテーション・オンリーなのですよね。

大中 でも、一応メンバー制ですから、メンバーになりたいと言うのなら、メンバーの誰かが面接をし、ゴルフに対する情熱や、霞ヶ関のメンバーになりたい理由を聞きながら、ラウンド・レッスンをするのがあるべき姿です。

川田 しかし、最近は仲間内で「あいつを入れないか」という有様です。

大中 ラウンドはするのですか。

川田 まあ、しますが、海外では2回やられましたよ。パインバレーがそうです。

大中 あなたの場合、マナーからルールなどみんな分かっていらっしゃいます。

川田 いや、知りませんよ。理事長と主（ぬし）のような人がいて、3人とも私と周るのは初めてでした。ホールアウトして食事の時に、「お前、今日から入れてやる。俺が選考委員会の委員長だって知っているか」と聞かれて、勿論知るわけはありません。そうして2階に連れて行かれ、ブレザー着させられて……。もう「ノー」とは言えません。入会金の額も聞けないし、どうしようかと思ったのですが、光栄なるお申し出だから、月謝だと思って入ることにしました（笑）

大中 それはまた強引ですね。

川田 もう一つは、米オハイオ州のザ・ゴルフクラブです。前の日にメンバーとコースを周り、著名なエド・スニード・プロも加わったのですが、結局私が勝ってしまったのです。グロスで73でした。こちらは日本人のアマチュア、しかも同い年だったので彼は物凄く悔しがっていました。そして他の2人が出した書類にサインをしたのですが、入会の知らせが届いたのは2年後でした。

大中 2年もかかったのですか。

川田 メンバーは125人しかいないのです。

大中　しかし、審査にはそんなにかからないでしょ。

川田　いや、空きがなかったのでしょう。

大中　長嶋茂雄氏が現役の大スターだった時、「東京ゴルフクラブに入りたい」と言ったところ、落とされたそうです。ただし数年後には入会を許されたようですが。

川田　なるほど。今はすぐに入れますが、1970年代は、まさに本物の方々がおられましたからね。鍋島さん、細川さん、近衛さん、中野敏夫さん、小栗三三さんなど、錚々たるメンバーです。

大中　そもそも「東京ゴルフクラブ」の入会条件は何ですか。紳士であることでしょうか。

川田　それもそうですが、鍋島さんも細川さんも「勝つか負けるか」という人達で、しっかりとゴルフをされていました。当時の人達はそのくらいの腕前を持っていましたし、若い時から一所懸命ゴルフをやらされていましたから上手くなるわけですよ。

大中　私もメンバーの方に誘われて東京ゴルフクラブで何度かプレイしました。中でも、元全日空社長の普勝清治さんは「ゴルフは2ラウンドだよ」とよくおっしゃっていましたね。まず朝7時半に集合し、8時からスルーで周ります。否応なしに2ラウンドです。

川田　当時はそんな事は良くありましたよ。私も日曜日4日と、祝日を入れて月10ラウンドと言う事もありました。

大中　しかし我々は8時前にスタートしないと2ラウンドは無理でしょうね。

川田　そんなことはありません。8時半でも午後3時半頃には終わってしまいますよ。しかも霞ヶ関の場合は東西2つのコースがありますから、2ラウンド周る人が結構多かったのです。

大中　紀文グループの保芦将人さんは、冬場のスタート時間を午前10時45分と決めていました。

川田　遅いですね。

大中　冬場の8時、9時というのはカチンカチンでゴルフとは言えない。他のプレーヤーが踏んづけてくれるこれくらいの時間がちょうどいい、ボールがちゃんと止まるしね、と言うのです。

川田　あの方のゴルフは本物ですからね。

大中　その一方で、クラブハウスを飲み屋代わりに使っている方々も少なくないようですが、もう少し19番ホールを楽しんでほしいですね。川田さんは19番ホールが得意ですよね。

川田　得意ではありませんが(笑)。

大中　あなたの話を聞くこと自体大変勉強になります。ラウンドを終わった後の会話が楽しいわけですよ。

川田　そう言って頂くのは有難いですね。

大中　あるメンバーと19番ホールで盛り上がったことがありました。お酒が入ったこともあって、失敗談義で大いに盛り上がり、気がつけば2時間半も話していました。そうしたら4人とも「19番ホールってこんなに楽しいんだ」と口々に言いながら、皆帰る気がさらさらありませんでしたよ(笑)

川田　それはいい時間でしたね。私も参加したかったですね(笑)。

大中　ゴルフは、単にプレイして「はい、さようなら」では面白くありません。そして、相手の失敗から学ぶ所が沢山あります。ナイスショットからは学べませんよ。

川田　本当にそうかもしれませんね。

大中　それと、キャディさんを「第5のプレーヤー」として味方につけた方がいいですね。ところでキャディさんにラインを聞くのは厳密にはルール上良いのですか。

川田　良いと思います。

大中　でも、川田さんがキャディさんにラインを聞いている姿を見たことがありませんね。

川田　そうでしょう、私は聞かない主義なのです。

大中　私はいつも「毎日見ているから分かるでしょ、どれくらいのスライスか教えてよ」と言う程度は聞きますが。

川田　しかし、強さによって違いますからね。

大中　「カップ2個半見て下さい」などとアドバイスを受けるのですが、やはり当たっています。

川田　それは、彼女達は毎日プレイを見ていますからね。全然違い

ますよ。

大中　一番癖のあるキャディさんがいるコースは「西の茨木、東の霞ヶ関」と噂されるように、茨木カンツリークラブで、私がドライバーとスプーンを持とうとしたら、キャディさんが「やめなさい」と言って5番ウッドを渡すのです。でも、これに反して無理やりスプーンで打ったところ案の定OBです。そこで、今度は指示に従って5番ウッドで打ったら上手く行きました。するとキャディさんは「ほら、私の言った通りでしょ」と（笑）。キャディさんを味方につけるのが得策、というのが最近よく分かりました。

川田　最終的にカリカリ来るのは自分に対してですからね。しかし最近、そのカリカリも来なくなったなあ、と思いますね。悔しくなくなっちゃったのですよ。

大中　それは駄目ですよ。私はいつも思うのですが、好敵手がいないとゴルフは上手くなりません。「今日の相手には負けてもいい。しかし来週の相手には負けたくない」と思いながらコースに臨めば絶対に違いますよ。

川田　本当にそうですね。

大中　さて、話は変わりますが、昨年、日米の首脳が霞ヶ関に行きました。しかしどうしてメンバーではない3人をプレイさせたのか、と言うのがちょっと疑問ですね。

川田　そうですね。私もそう思います。

大中　やはり官邸から頼まれたのでしょうね。そして、トランプ大統領から「是非松山英樹プロと周りたい」とのお願いもあったわけですね。

川田　もちろんトランプさんは、安倍さんが上手くないことは分かっていますから2人でコースを周っても面白くはない、と考えても不思議ではないでしょうね。

大中　トランプさんはシングルですよね。

川田　シングルどころか3か4ですよ。

大中　ところで、改めてお聞きしたいのですが、どうして力はトップで抜けないのでしょうか。プロにも「ヘッドは上がったら必ず落ちて来る、しかしあなた達はどうしても引いてしまう」と言われました。

川田　それは、自分で何かしたいからでしょうね。打つ時にエネルギーを100％ぶつけたい、逃がしたくない、でも自然に落とせば100％になるのに、自分ではどうしても100％にならないと思って力を入れてしまうのですね。そうすると軌道が変わってしまいます。私も最近になってやっと分かって来ました。この勘違いから抜け出すには、やはり相当球を打たなければ駄目でしょうね。

大中　川田さんが自分のトップを極めたのはいつ頃ですか。

川田　そうですねえ。30歳の頃でした。

大中　クラブを握ったのはいつ頃ですか。

川田　20歳です。

大中　すると、トップを極めるまで10年かかったという事ですか。

川田　いえ、20代の時に一度トップに上り、その後ちょっと落ちてから再びトップになったというわけです。

大中　最初の壁は。

川田　30代になってうまく行くようになったのは、アイアンで左にずれれば絶対に当たると思ったからです。やはり、これも球数を打ったからでしょうね。

大中　球数の話ですが、麻生太郎さんは、衆院議員に当選して3期目を果たした頃、金丸信さんに「そろそろ党の仕事をしてほしい。ゴルフか麻雀のどちらかをやりなさい」と厳命されてゴルフを選ぶのですが、その直後に衆院選で落選、毎日曜日、麻生飯塚ゴルフ倶楽部に通い、藤井義将プロから猛特訓を受けたそうです。

川田　そうですか。

大中　その時、麻生さんが「初ラウンドで50を切りたい」と話したところ、藤井プロは「2万発打つまでコースに出るな」と言ったそうです。

川田　それは凄まじいですね。

大中　しかし麻生さんはやり遂げ、初ラウンドで51、49を叩き出したそうですよ。

川田　すごい努力家ですね。

大中　麻生さんはスタートの1時間半前には来て、練習場に直行し、2箱打ちます。その後、アプローチとパターをこなし、30分前になった時点でクラブハウスに出向き、皆さんに挨拶するのです。川田さんも練習していますよね。

川田　いえ、昔はしていましたが、現在はあまりやっていません。終わってからです。朝はタイミングを確認するために、球を3つくらい握り、アプローチのところでサンドウエッジを使ってゆっくりと打つんです。しかし、いい時は何も考えなくとも上手くいきますね。

大中　練習場でいい球を打っている人に限って本番では微妙に力が入ったりしますよね。

川田　よくありがちですね。

大中　400ヤードならば、ドライバーを軽く振って、アイアン、アイアンで3オンするのですが、ドライバーとスプーンを選んで、結局木の下やバンカーに直行して、しかもそこから1打では抜け出せず、ダボかトリプルになってしまい、いつまでたっても51～52なのです。

川田　7番、そして9番で打てばいいのですよ。

大中　じゃあ最初から5番を使えと。370ヤードで、5番で150ヤード行けば、後は7番、ウェッジで3オンします。しかしこれではゴルフとは言えないでしょう。

川田　いえ、それもれっきとしたゴルフですよ。

大中　スコアに固執するのか、自分が納得するプレイを追求するのか、ということですね。

川田　私が家内に言ったのは「スコアはつけるな」です。大事なのは、自分が何発いい球を打てるかです。ある日、180ヤードのホールで悩んでいるので、「7番アイアンで打てば100ヤード、そうすればバンカーに届かず、フェアウェイに球が落ちる、そしてちょこんと打てばいいだけでしょ」と諭すと、驚いていました。スコアで行くならこれです。

大中　最後に、ゴルフの究極の遊び方を教えてくれた方がいるのです。昭和電工元社長の鈴木治雄さんですが、超多忙のため、1年間でどんなに努力しても18回しか行けないけれど、「年間でパープレイしたい」と言うのです。要するに今日1番ホールでパーを取ったら、これを消して全18ホールを年間18回で全部潰していく、というわけです。

川田　それはもの凄くうまい非常にいい遊び方です。しかし18回でパープレイに持って行くには、相当上手でなければ不可能です。

大中　確かに上手でした。

川田　やはり大中さんが指摘するように、ゴルフの醍醐味は「19番ホール」ですね。

大中　そう思います。本日は有難うございました。